義歯を洗う

益池　成和

長い間店をやっている。大学を出て靴下会社にどうにか職を得たものの、その年の十二月で早くも音をあげ辞表を出した。単身で北海道から出てきて、靴下を売って四階建てのビルを所有した社長の強引な仕事ぶりについていけなかった。

見かねた父親が店を持たせてくれた。たまたま持っていた田畑の上に高圧線が走っていたので、決して少ないとは言えない保証金が電力会社から入った。父はその金で五十坪ほどの二階建ての貸店舗を建てた。その一室で商売でも始めてみるか、となった。大学受験から就職活動まで悉く思いのままにならなかった。それで直ぐさまその話に飛びついた。毛布の端切れをつなぎ合わせて販売する店を始めた。二十七歳の秋のことである。以来今日まで利を得る内容は変わってきたものの、店としては存続している。

私の店は府道沿いの角地にある。開店当時には目の前に準大手建設会社の社員家族の為の寮が三棟建っていた。百四十軒ほどの世帯があったはずである。その社員寮は年々空室が増え、十年ほど前にすべて解体され、今は卵の配送センターに様変わりしている。

開店したのはつい昨日のように感じられなくもないけれど、事実として、今日まで三十六年の月日が流れ去ったことにある。二十代半ばの男が、ふと気づいてみると、還暦を三年も過ぎ、昔なら（今もだろうけれども）老人といっていいものになってしまった。

二十年前、すぐ近くに大手のスーパーマーケットがやって来た。そのため私の店を素通りする人の行き来が以前より確実に増えた。どうかすると毎日見かける人もいる。ごく最近になって、見慣れた名も知らない人達の様子がいつしか様変わりしていることに、ふと気づいた。大抵は女性なのだが、元気に背筋を伸ばして歩いていたはずの人が、一様に背をかがめ、その多くが杖をついたり、かご付きの歩行器のようなものを押していたり、なかには介護者に手をとられて曲がって行ったりしているのである。

一昨年の九月母親が倒れた。八十五歳の誕生日を十日あまり過ぎた日のことであった。急に身体の自由がきかなくなった。一階の母の寝室のすぐ横がトイレなのだが、自力でそこまで行けなくなった。それどころか電動ベッドからも起き上がることが出来なくなった。仕方なく身体を支えどうにか立ち上がらせたのだが、背中を押しても足が一歩も進めなくなった。

母は私と同じく先天性股関節脱臼で生まれてきて、七つ年下の妹を出産した後、今では行われない固定術という股関節の手術を受けた。片方の足の骨頭を大腿骨に直接括り付けてしまうものである。二十数年後、もう片方には今ではごく一般的な人工骨を入れる手術を受けた。

今から十年前、その埋め込まれた人工骨に菌感染をおこし再手術を受けた。七ヶ月に及ぶ入院だった。どうにか車椅子の生活は免れたが、それ以来両手で杖を頼りの生活ぶりになった。足は五センチほども上げることが出来なくなり、助けなしに外出もままならなくなった。それでもどうにか家の中で食事を作ることや洗濯などはこなしていた。

ただでさえもよちよち歩き程度の足の運びだったのが、歩幅が極端になくなってきたことに気づいたのが、年が改まったあたりのことであった。それと時を同じくして、急に病

院に行くことを拒絶しだしもした。人工骨置き換え手術を受けた者は、年に一回レントゲンのチェックを受けるのだが、前年の十月には一緒に病院に行き、主治医の院長に機嫌良く向かっていたのが、年をまたぐと私の車に乗ることさえ拒絶するようになった。母は度重なる足の手術のため両方の足の長さに長短が出来てしまっていて、それを補うため底の厚い装身靴を常に履いているのだが、たまたま新しいものを医療保険を使って申請していた。補助金をおろすには主治医の確認と意見書が必要となり、診察を受けなければならなかった。私にしてみれば、足の運びのことを相談するいいタイミングだった。ところが予約日の朝、母はベッドに横たわったまま動こうとしなかった。前夜まで、いつもと変わらず不自由ながら家事をこなしテレビを見ていたにも関わらず。促すと、しんどくて行けないという。しんどいなら病院に行くのが当たり前だろうと怒鳴っても無駄だった。かたくなに身体を起こすことすらしない。それが昨年の二月の出来事だった。

今にして思えば、病院通いすら拒絶する母のあの行動は、何らかの自覚症状があったうえのことだったに違いない。

ベッドから立たすことが出来ても、五、六歩先の便所にも行けないのでは救急車を呼ぶしかなかった。近所に住む妹に来てもらって、それでも病院に行くことを愚図る母をどうにか説得し（救急車も本人の同意がないと搬送をしてくれない）、かかりつけの病院に連れて行ってもらった。

身体の不調は極度の貧血という見立てだった。緊急搬送になった翌日、早くも輸血の同意書にサインを求められた。その後様々な検査を受けたが、貧血の原因は一向に特定されなかった。特定がなされないまま、入院期限のめどである三ヶ月が過ぎ、受け入れ先の施設をあたってくれと、ある日主治医に呼び出され告げられた。また悪くなるかも知れないが、ここでの治療は一応終わったということであった。

そこで今まで世話になってきたケアマネージャーに相談し、リハビリを重視した施設に申し込んだのだが、貧血の数値で入居は断られてしまった。施設の見解はまだ治療の段階で、先に身体を治してほしい、改善されればいつでも受け入れる、というものであった。

行き場を失って仕方なく、股関節の手術を行った大阪南医療センターの血液内科を受診することになった。主治医がこれ以上の検査はうちでは限界があり、血液内科のある医療機関に行ってもらうしかない、といったからである。ネットで調べてみると大阪南には対象の外来があった。そこで早速受診を申し込んだ。そこには何らかの病源が判明すれば、そのまま大阪南で入院ということもあり得るという期待もあってのことだった。今の病院では、人手不足もあって、母はリハビリらしいリハビリをうけさせてもらっていなかった。経験上大阪南なら、入院当日から理学療法士等が付いてくれるのを知っていたからである。

だが、血液検査の紙を見ながらの医師の見立ては、血液内科の範疇ではなく、消化器にまわってくれというものであった。消化器科にまわると、胃カメラを飲んでもらわなければならないということになった。その時の若い医師の検査にあっての注意説明が悪かったのだろう、母は検査を受けることに難色を示した。結局のところ、入院中の外来診察ということで、帰ってから現在の病院で胃カメラを飲むということで外来をあとにした。

翌日の昼前のことであった。病院から連絡が入り出向くと、母の主治医は不明だった貧血原因が判明したことを告げた。胃カメラの映像を見ると、即座に分かったらしい。母は胃がんだった。内科担当の主治医は、四度の血液検査のデータを見てもがんを疑う値が出

てなかったので、消化器系統の疑いを真っ先に消してしまったと、いいわけがましく説明した。五ヶ月以上入院しながら、母は一度も胃カメラ検査を受けていなかったのである。

診断結果が決すると事の運びははやかった。入院中の病院では手術はしていないということで、すぐさま柏原市民病院に連絡が取られ、本人不在でもいいということで私と妹が出向き、その場で母の転院が決まった。

介護タクシーを使って搬送された市民病院で、その日のうちに諸々の検査が行われ、母の意思確認がとられたあと、翌日の手術が決まった。母は何しろ八十五歳という高齢である。くわえて半年前からベッド上のみの生活であり、何よりも三十キロにも満たない体重だったこともあって、はたして外科手術など受けられるものだろうか、という疑念が拭えなかった。これが医学の進歩というものだろう、四時間あまりの手術は私達の危惧をよそに無事成功した。さいわい術後の経過も順調で、二十日ほどで元いた病院に戻った。

母の入院中病院が車で十分ほどの距離だったこともあり、出来るだけ顔を出すようにした。ぼけられても困る、という思いもあった。当初は店を半時間ほど早くに切り上げ、毎日のように寄って帰った。何処までが本音か分からないが、私への気遣いだろう、程なくして毎日はいいからといわれ、二日に一度となった。

見舞う時間は決まって夕食時だった。食事のあと、義歯を洗ってほしいと頼まれたからである。ほぼ老人ばかりの病棟である、そのようなことは看護師の仕事なのだが、母に一抹のためらいがあったのだろう。黄色いコップに上下の入れ歯を入れ、持ち込みの歯ブラシでトイレの前の流し台で洗った。初めての日、母の義歯を素手で持ちながら、汚いと思った。長い間生活を共にしながら、これまで親の義歯などまともに見たことさえなかった。食べ滓が黄ばんだ人工の歯に所々まとわりついていた。が、慣れというものだろう、二、三日も経たないうちにそのような思いは消えてしまった。義歯を洗うことは見舞うときの私の日課になった。

元いた病院に戻ってからも母の様子は至って順調だった。元々が小食だったこともあったかも知れないが、胃の三分の二を失った割りには食も細っているようには見えなかった。むしろ以前より食べているようにも感じ取れた。戻った翌週早くも主治医から呼び出しがあり、受け入れ先の準備を再び促された。その足で病室に向かい退院後のことを尋ねてみた。すると母は、私の目を見つめながら、私の思いはおまえが一番知っているだろう、家に帰る、ただそれだけ、と言った。確かに、昨年の十一月あたりから再三紅白を家で観たい、クリスマス頃には車で迎えに来てほしい、と言い続けていた。

入院生活に入ったことによって、母はすでに介護保険の範疇から抜けてしまっていて、家には電動ベッドも撤去されたままになっていた。無論その時点では病気の特定すらなされてはおらず、退院など出来るはずもなかったが、母のその要望に私は随分と苦労した。

翌日私は今まで世話になってきたケアマネージャーに再び電話を入れ、退院後のことを相談した。彼女は施設や療養型の病院など、二、三具体的な名前を出したあと、本人の思いと私の考えを質してきた。母の願いを伝えたあと、自宅療養も考えの中にあることを口にした。言うまでもなく、はたしてそのようなことが可能なのか、という思いはあった。だが、出来ることならば、母の意思を尊重したかった。いや、長年同居し続けてきた息子として、すべきだとも思った。

私の答えを聞いたあとケアマネージャーは、家族の人が腹をくくるなら私達も全面協力

すると言った。その場で母との面談日時が決まり、病院の婦長にはこちらから連絡を入れておくから、と言って電話が切れた。

三日後の午後のことだった。ケアマネージャーと介護スタッフ、理学療法士の三人が母のベッドを囲み、笑顔で挨拶を交わした。いずれも女性で、入院するまで母が散々世話になってきていた人達だった。婦長は顔を出さなかった。短い談笑のあと、ケアマネージャーが自宅療養になった場合のことを細々と説明し、母に直接退院後どうしたいですか、と改めて尋ねた。すると母は、家に帰りたい気持ちが三分の二で、施設でもという気持ちが三分の一と口にした。予期もしない返答だった。唖然となった。わざわざ来てくれた三人に申し訳ない、という思いが生じた。と同時に、助かった、とも思った。　　その日の夜私はいつもの通り一人になった家に帰宅すると、スーパーで買ってきた酒の当てを応接間のテーブルに並べ、缶ビールをコップに注ぎゆっくり飲み干した。そして朝食の残りご飯でお茶漬けをした。次に通販でとっている赤ワインも少し飲んだ。

　これと言って見たいテレビ番組がなかった。仕方なく音楽のライブ映像のＤＶＤを観ることにした。最近気に入りの平原綾香だったかも知れない。あるいは中島みゆきのコンサートツアーのものだったろうか。おそらく音楽がいけなかったのだろう。ふいに、母がなぜあのような答えかたをしたのか、と考えた。婦長だろうと思った。何度かの退院後の落ち着き先の相談で、主治医も婦長も、こちらが自宅療養を持ち出すと、一様にとんでもないという顔つきをしたことが思い出された。知らぬ間に涙が出ていた。酒を続けたのもいけなかったのだろう。気がつくと私は液晶画面を見つめながら、声が出ていた。それからしばらく、嗚咽は止まらなくなってしまっていた。

　母は今隣町の療養型病院に世話になっている。